れがたし集を失ふ手段やあると四邊回顧し語へば音次は莞爾と打笑みてそれこそ拙者操て料るところあれいと恐れある事ながら暫時お耳を拝借せんと花里の耳に口と寄せ何鮫ひそく呟けば花里ハいと嬉しげにいくたびとなく點頭きけり是より兩人如何なる奸計を廻すやその詳細ハ回を重て分説るを見て知るべし

○第四回

妾花里ハ石田音次と謀合せ若殿の毎朝機嫌伺ひの爲め長憲ぬしの許へ出頭せらるゝを幸ひ毒藥と加味したる菓子を與へて毒殺せんと密に其用意を成し安政五年の冬のこと一日若殿が奥家老柳原源左衛門に手を引れて出來り例の如く長憲ぬしに挨拶しやがて退出されんとせしを花里ハ例になく今暫時しと引留めまゐらせ用意の菓子を進めて饗應せしが若殿にハ幼年にてそおハすれ生賀最質しく殿て母堂より假令お表にて如何なるおん饗應に逢ふとも必之を喫うぶる事なく持歸るやう仰含められしを心に忘れ給ハでその菓子にハ手だに觸給ハずそのまゝ持歸りたまひぬ花里ハ目前望を遂げざれば恐慌さのかぎりなく密に音次と其事を語ひ人を廻して若殿の樣子と探らせしに更に變りたる事もなく翌朝例の如く出頭ありしかば此度ハ手自らその菓子を持いで强てひとつと勸めたれど若殿にハ小父上の御前にて頂戴いたすハ恐れありとのみ敢て言に從ハず昨日の如く紙に包みて持歸りければ花里ハ爰に再度望を失ひ若殿の才發力ると後室殿の戒心深きを心の理に感ひつゝ又も音次と招寄せ尚も後圖を語ひけり偖も若殿にハ花里の勸めたる菓子を携へて西御殿へ歸り今日も小父樣よ